

■金閣寺(鹿苑寺)

1. 概要

鹿苑寺(ろくおんじ)は、京都市北区にある臨済宗相国寺派の寺。相国寺の山外塔頭寺院。寺名は開基である室町幕府3代将軍足利義満の法号・鹿苑院殿にちなむ。義満の北山山荘をその死後に寺としたものである。舍利殿は室町時代前期の北山文化を代表する建築であったが、昭和25年(1950年)に放火により焼失し、昭和30年(1955年)に再建された。平成6年(1994年)にユネスコの世界遺産(文化遺産)「古都京都の文化財」の構成資産に登録されている。

2. 歴史

元は藤原公経(西園寺公経)が西園寺を建立し、併せて山荘(「北山第」)を営んでいたが、室町幕府3代将軍足利義満が河内の領地と交換に西園寺家から譲り受けた。当時「北山殿」または「北山第」と呼ばれた。応永15年(1408年)に義満が死亡すると、後に北山第は義満の遺言により禅寺とされ、義満の法号「鹿苑院殿」から鹿苑寺と名付けられた。庭園は文化財保護法により特別史跡・特別名勝に指定されている。

3. 境内

(1)舍利殿(金閣)

金閣は木造3階建ての楼閣建築で、鹿苑寺境内、鏡湖池(きょうこち)の畔に南面して建つ。屋根は宝形造、柿(こけら)葺きで、屋頂に銅製鳳凰を置く。初層は「法水院」、奥に須弥壇を設け、壇上中央に宝冠釈迦如来坐像、向かって左に法体の足利義満坐像を安置する。二層は「潮音洞」、仏間内部は、須弥壇上に観音菩薩坐像(岩屋観音)を安置し、須弥壇周囲には四天王像が立つ。三層は「究竟頂」(くつきょうちょう)といい、仏舎利を安置する。初層が蓐戸を用いた寝殿造風、二層が和様仏堂風であるのに対し、三層は花頭窓を用いた禅宗様仏堂風とする。

(2)方丈

本堂に相当。単層入母屋造で棧瓦葺。延宝6年(1678年)、後水尾天皇の寄進により再興された。

(3)陸舟(りくしゅう)の松

方丈北側にある足利義満手植えと伝えられる松。京都三松の一つ。

(4)銀河泉(ぎんがせん)

足利義満がお茶の水に使ったと伝えられる泉。

(5)巖下水(がんかすい)

足利義満が手洗いに用いたと伝えられる泉。

(6)夕佳亭(せつかてい)

金森宗和好みと伝えられる茶室。現在の建物は明治7年(1874年)に再建されたもの。床柱は茶席としては珍しく南天の木が用いられており、よく知られている。

(7)庭園

金閣を水面に映す鏡湖池(きょうこち)を中心とする池泉回遊式庭園で、国の特別史跡・特別名勝に指定されている。鏡湖池には葦原島、鶴島、亀島などの島々のほか、畠山石、赤松石、細川石などの奇岩名石が数多く配されている。

(8)不動堂

天正年間に宇喜多秀家が再建したとされ、金閣寺境内に現存する最も古い建物。本尊は空海(弘法大師)作の伝承を有する石不動明王。江戸期から既に庶民信仰の対象であった。

◆金閣寺に関連する事項:

室町幕府: 三代将軍 足利義満の別邸。生存時には北山第(又は北山殿)と称される。

足利義満が没してから、義満の院号、鹿苑院殿、から鹿苑寺と称されるようになる。

足利 義満(あしかが よしみつ)とは、室町時代前期の室町幕府第3代将軍(在職 1368年 - 1394年)である。父は第2代将軍足利義詮、母は側室の紀良子。

南北朝:

南北朝の合一を果たし、有力守護大名の勢力を押さえて幕府権力を確立させた。(詳細後述)

北山文化:

鹿苑寺(金閣)を建立して北山文化を開花させるなど、室町時代の政治、経済、文化の最盛期を築いた。

義満が邸宅を北小路室町へ移したことにより、義満は「室町殿」とも呼ばれた。後に足利将軍を指す呼称となり、政庁を兼ねた将軍邸は後に歴史用語として「室町幕府」とばれることになった。

1397年(応永4年)には西園寺家から京都北山の「北山弟」(ほくさんてい)を譲り受け、舍利殿(金閣)を中心とする山荘(「北山第」(きたやまてい)または「北山殿」(きたやまどの)、後の鹿苑寺)を造営した。

1399年(応永6年)春以降、義満は本格的にこの山荘に移り住み、活動の拠点としていく[26]。この時代の文化を、武家様・公家様・唐様(禅宗様)が融合した北山文化と呼ぶことも多い。また北山文化の芸能である猿楽では、義満は観阿弥・世阿弥父子を庇護した。

また、足利義満が建設を進めた特筆すべき建築物として、1399年に京都相国寺に完成した八角七重塔がある。塔の高さは、360尺(約109m)に及ぶ高層建築物であり、以後500年以上、日本最高記録となっていた。相国寺の七重塔は、4年後に落雷により焼失したが、翌年の1404年には同等規模の北山大塔を金閣寺付近に建設したという。

勘合貿易:

義満は明との正式な通交を望んでいた。しかし1374年(応安7年)の遣使では、明側は南朝の懐良親王を「日本国王良懐」として日本における唯一の正規な通交相手として認めていた事と、

天皇の臣下(全ての民の君主である中国皇帝から見て、その家臣である天皇の家臣は陪臣)との通交は認めない方針のため、幕府の交渉は実らなかった。

1380年(康暦2年)にも「日本国征夷将軍源義満」名義で交渉を始めようと試みるが、これも天皇の家臣との交渉は受けないと理由と、宛先を丞相にしたという理由で入貢を拒まれている。

そこで義満は応永元年12月(1394年)に太政大臣を辞し、出家した。これにより義満は天皇の臣下ではない自由な立場となった。

墓所: 等持院に足利義満の墓とされる塔がある。

法名は鹿苑院天山道義。等持院で火葬された義満の遺骨は、相国寺塔頭鹿苑院に葬られた。以後相国寺は足利将軍の位牌を祀る牌所になったが、天明の大火で灰燼に帰して衰微した。鹿苑院に至っては明治になってから廃仏毀釈のあおりで廃寺の憂き目に遭う。そのため義満の墓所はその正確な位置が不明となってしまったが、位牌は足利家と縁の深かった臨川寺に移され安置されている。